岩瀬文庫写本 世話類聚、天理本の写本 かた事なをし

―『かたこと』の系譜 その二―

白木 進

汎例 本稿の中の

A、かは『かたこと』、浮は『浮世鏡第三』の略号である。

B、か18、浮25のアラビア数字は、かたこと18条（笠間選書53かたこと参照）、浮世鏡第三25条（同選書122「かたこと」考の付録頭注浮世鏡第三参照）を指す。

一、岩瀬文庫写本 世話類聚について

1、世話類聚の諸本

国書総目録にいう、

世話類聚（せわるいじゆ） 一冊（類） 語彙（写） 岩瀬（柳亭種彦書入本）と。縦24センチ 横17センチ 31葉。序文の終りに 海汀疑木軒品少子誌とあり、或いは著者の名か。序文には年月日の記入なく、奥書も欠く。刊年不明。

岩瀬文庫本以外の世話類聚については、「方言」の四巻12号（昭9、12、）に泉井久之助氏の「世話類聚」の片言について の一文あり、京都で池上貞一氏本・石浜氏本（共に写本）の世話類聚を見ての立論である。また国研に油印版ながら東条操旧蔵本の世話類聚がある。以上の四者を比較表示すると左の如し。

項目別＼本の種類	1岩瀬本（31葉）	2池上本	3石浜本	4国研の油印版本（19葉）
巻の表紙に	―	―	藤井玄仲老斉書	―
序文の後に	海汀疑木軒品少子誌	―	―	―
跋の後に	―	海訂疑木軒	海汀疑軒	海汀疑軒
巻末に	―	享保十五庚戌仲冬中旬写之 松月	―	―
拾遺	世話類聚拾遺	―	―	―
	一木子撰	（但し拾遺に該当する語句は、本文の中に適宜に追加）記入されている。		

岩瀬本最後の二葉は拾遺で、拾遺のあるのは岩瀬本のみ。（2・3

は未見、泉井氏の解説本による。）

2、世話類聚の構成（岩瀬本31葉を、仮に62頁とみて、その頁数を参考に附す。）

世話類聚序　2—6ペ

〃　目録　7ペ

正篇　二言　三言　四言　五言　六言　七言　八言　9—28ペ

雑篇　片言雑言　重言雑言　重言不復雑言　旧来読曲二言　以錯謬伝雑言　訛与不訛雑言　譬喩雑言　29—57ペ

世話類聚（世話の義と本書作成の意を説く。）8ペ

正篇

二言　9ペ　三言　10—12ペ　四言　12—18ペ　五言　19—22ペ

六言　22—25ペ　七言　25—26ペ　八言　27—28ペ

雑篇

片言　29—37ペ　重言　37—40ペ　重言不復　40—41ペ

旧来読曲　41—42ペ　以錯謬伝　42—44ペ　訛与不訛　44—45ペ

譬喩　45—50ペ

（附）百物　50—57ペ

頼物　嬉物　惜物　危物　無益物　見事物　無用物　不レ応物　斟酌物　聞度物

跋　58ペ

59ペは餘白で、種彦の書き込みあり（後述）。

世話類聚拾遺

片言付重言　訛音付記　60—61ペ

62ペは余白で、種彦の書き込みあり（後述）。

3、著者と著作年代

池上本の巻末に、享保十五庚戌仲冬中匆写之　松月　とあり、少なくとも享保15年(1730)以前の著作ではある。跋後に海汀疑木軒（石浜本・国研本は海汀疑軒）と名が入れてあるから、或いはこれが本書の著者かと泉井氏は言い、石浜本の表紙に藤井玄仲老斉書という文が見られるから、玄仲は単なる筆写者でないとすれば、走卒に考えて二人は同人だと思われ、玄仲その人が著者であるようでもある。とも言う。

大田栄太郎氏に「世話重宝記と世話類聚に就て」なる論文がある（郷語書誌稿　続篇）。先述の方言四巻12号に出た泉井氏の解説と、併せて載せられた世話類聚の雑篇「片言」の部の翻字版とを見ての論であるが、著者については、

(イ)、石浜本表紙の藤井氏、池上本巻末の松月と合わせて**藤井松月**と見るなら、浮世呉竹（貞享五＝元禄元年刊）の著者「藤氏松月」と同一人ではないか。

(ロ)、海汀疑木軒からは浪花の浜か日本海岸が考えられるが、内容に見る訛音の例からすれば日本海岸ではあるまいか。浮世呉竹は『かたこと』からの単なる抜萃本であり、世話類聚も未熟本である。前書を貞享5年(1688)に作り、後書を享保15年(1730)に写したとしても書いたとしても、年代的には無理なく考えられる。とし、また題名の世話という語を中心に発展過程を考えるなら、下学集・重宝記大全→世話重宝記→世話類聚となり、世話類聚は享保15年の写本である

が、もとは元禄頃のものかとも思われる。という。

岩瀬本62ぺの種彦の書き込みに、

此書貞享〔綱吉時代 1684—1688〕の頃の著述なるべし其証別記にいふべし文政己丑浅草にて得たり 柳亭種彦

とあり、その別記なるものを種彦の著作から探しているのだが未だ見つからない。

岩瀬本の拾遺の後に記す一木子とは疑木軒と関係のある名か否か。拾遺に載せる片言は55語、本文のように字数による分類もなく、内容的な書き分けも見当らず、得るに任せて書き継いだものと思われ、中には再録（半紙など）もある。一木子とは疑木軒の中の一木くらいの意で、著者とは別人であろう。

なお岩瀬本の序文後の海汀疑木軒の下に小書きせる品少子とは謙称でもあろうか。

4、世話類聚にみる『かたこと』の投影

世話類聚を一読して感じることは『かたこと』の語句・項目と同じもの、類似のものが非常に多い。特に「片言」の項に多い。試みに岩瀬本に拠りそれを拾いあげてみる。

（註）文中の㋕は『かたこと』、㊁は浮世鏡、△はかたこと百廿ケ条の略号。アラビア数字はかたこと（笠間選書53）、の頭註かたことに、また「かたこと」考（笠間選書122）の中の頭註浮世鏡第三に附してある項目番号を指す。

正篇　二言（39句）

順ノ拳—㋕796　腐鯛—㋕764　犬ノ蛇—㋕760　急廻—㋕52　以上4

三言（98句）

無ニ権興一—㋕67　我佛貴—㋕293　以上2

四言（165句）

膝共談合—㋕789　手入足入—㋕660　蟻息上レ天—㋕790　易物高物—㋕781　売詞買詞—㋕765　（上手成頼—㊁83）　以上5

五言（89句）

寵愛高成尼—㋕792　昔剣今菜刀—㋕791　阿弥陀銭光—㋕13　以上3

六言（51句）

雁八百矢三文—㋕755　雀成レ百不レ忘レ踊—㋕761　言ニ他事一置ニ目代一—㋕794　以上3

七言（25句）

忠言逆レ耳良薬苦レ口—㋕75　以上1

雑篇（次の解説の語あり。句読点は筆者）

片言者詖也。非下良人之可ニ言也。猶下沿ニ長流一聞中船脚之言上也。**重言**者雖ニ其詞異一、其心是同。如下閑ニ歩大路一立中車夫之前上也。雖レ畳ニ文字与ニ言語一、其心是別。為ニ之**重言**。**不レ復**。如レ並ニ瓜与レ売瓜也。以ニ直音一呼ニ拗音一唱ニ直音一、謂ニ之旧来**読曲**一。如レ侍ニ講師之席一也。馬有ニ止動反一、牛有ニ止往替一、是非ニ馬牛咎一。須レ謂ニ人之為一耶。人亦不ニ巧認一、只自

岩瀬文庫写本　天理本の写本　世話類聚、かた事なをし　—『かたこと』の系譜　その二—

然反替耳。名ニ之以レ錯謬伝一。如下韓人与二韓人一夜話上。

訛与レ不レ訛者如下花洛人与二東夷客一雑居上也。彼似二于是一、是如二于彼一、比校之故、似如是則譬喩也。蓋聞二之有人一、是乎非乎不レ能智也。

以下に片言、重言、重言不復、読曲、以レ錯謬伝、訛与不訛、譬諭を述べるに当り、その語を解説した。右の項で新味なのは訛与不訛で、同音語のアクセントをとりあげたものらしく、あげた52語と附した円圏とを左に掲げる。

栢。蚊帳。萱。橋。箸。端。錐。桐。槌。土。笠。瘡。上。神。下。霜。隅。墨。鍬。桑。鶴。蔓。紋。門。花。鼻。春。張。蟻。鋲。釜。鎌。書。闕。牆。柿。沖。熾。鐶。棺。雨。餳。菊。聞。酒。鮭。鯖。生。飯。櫃。様。海。膿。

片言雑言片言音訓付レ左正訓付レ右

（片言の項は、世話類聚に収めた全句をあげ、『かたこと』との対比を示す。）

（一字のもの39語）

布ノ（ヌノヨノ）—か 355　粽（チマキヨツマキ）—か 576　夕（ユウベヨンベ）（浮 237）　狼（ヨヽカミヨヽカメ）—か 562　洒（ワヽグスヽク）（か 77）　重（ヨモキヨモタヒ）—か 211　曾（カツテカツヽテ）—か 254　己（ヨノレヨト（ド）レ）—か 286　構（カマヘテカンマヘテ）—か 260　蛙（カヘルカイル）—か 536　終（ツイニツイト）—か 118　踵（クビスキビス）—か 465　鉄（チョウノチョンノ）—か 427　餘（アマリアンマリ）—か 117　陸（クガコガ）　樟（クスノキクノキ）—か 500　仇（アタアタン）—か 263　狸（タヌキタノキ）—か 561　先（サキニサッキニ）—か 25　鰻（ウナギヲナギ）—か 544　甄（モテアソビモチヤソビ）—か 221　足（タルタンノ）　頑（カタクナカタクハ）　蟆（ホソヘソ）　冠（カンムリカモリ）　欒（ムクレンジユムクロシ）　蟆（ヒキガヘルフクガヘル）　懼（オソロシヲドロシ）　倒（サカシマサカサマ）　投（モグムグ）　虹（ニジミヤウジ）　疼（ヒラツクヒリツク）　寒（カ、ゲルカラケル）　動（ウゴクイゴク）　綻（ホコロブフクロブ）　泥（ヨリヨドモリ）　夷（エビスエベス）—か 302　腮（アギトアゴタ）（浮 12）

（二字のもの134句）

印地（インヂインヂン）—か 32　落著（ヲチツキウチツキ）—か 188　御畳（ヨヒルナレヨヒンナレ）—か 262　練磨（レンマンレンマン）—か 141　後見（ウシロミヲシロミ）—か 310　石垣（イシカキイシカケ）—か 625　御主（ヨヌシヲノシ）—か 300　同事（ヨナジコトヨンナジコト）—か 113　廉直（レンチヨクリンチヨク）　官途（クワンドウクワンドウ）—か 177　忌明（イミアケユミアケ）—か 256　御首（ヨグシヲゴシ）—か 468　夜一（ヨヒトヨツヒト）—か 277　中々（ナカ〳〵ナツカ〳〵）—か 10　矢張（ヤハリヤツハリ）—か 663　途迷（ドニマウドウニマヨウ）—か 232　昨日（キノウキンノウ）—か 278　大略（タイリヤクタイラク）—か 127　不斜（ナ、メナラズナノメナラズ）—か 6　懇望（コンボンコンボン）—か 144

メイヨ 名譽 (か) 240
ゼヒ ゼツヒ 是非 (か) 53
スイビ スイヒン 衰微
ミマサカ イマサカ 美作 (か) 594
サイレイ サイリヤウ 祭禮
セツタイ センタイ 接待
ヨンヤウ ヨヽシヤウ 和尚 (か) 73
カンビヤウ カイビヤウ 看病
シユミヤウ シミヤウ 取名
チクシヤウ ツクシヤウ 畜生 (か) 568
ロチ ロウチ 鹵地 (浮) 213
ゴクハツ ゴンクハツ 五月
セギヤウ センギヤウ 施行 (か) 110

ジユウ ジヨウ 自由 (か) 150
ヒトヒ ヒツテ 一日 (か) 276
タイマ タツタイマ 只今 (か) 24、28
カイセイ カイセン 皆濟
サゼン ジヤセン 座禪
ギヤウトウ ビヤウドウ 行導
タンバウ テンハウ 且方
フルマイ フレマイ 振舞
ロリツ ロレツ 呂律
ホンブク ホンボク 本復
ムロマチ モロマチ 室町 (か) 603
コカウ ゴンカフ 五合
シユンレイ ズンディ 巡礼

シンロウ シンドウ 辛勞 (か) 165
コンキウ コンキ 困窮
ジユンノマイ ズンノマイ 順舞
サゼンシヤウ クワツシヤウ 合掌 (か) 111
ヒガン ヒングワン 彼岸 (か) 270
クワクラン ハクラン 霍亂 (か) 479
タンバウ テンハウ 且方
リウグヴ リウゴン 龍宮 (か) 199
シユビ シビ 首尾 (か) 140
ヨジツ ヨゼツ 餘日 △2
ジツキ ジツキン 十騎
セイジン セイシ 成人
シクハツ シンクハツ 四月 (か) 281
セイモン センモン 誓文 (か) 220
トウシユ トウシユ 唐紙 (か) 385

ジユツナイ ゾツナイ 無術 (か) 222
ガシ ガシン 餓死 (か) 190
ナイヘ ナイヘ 地震 (か) 676
ボツラク ボツタク 没落
シドウ シユドウ 祠堂
モクヨク モクロク 沐浴 (か) 108
シユモツ シンモツ 腫物 (か) 480
ヨジツ ヨゼツ 餘日 △2
ジツキ ジツキン 十騎
セイジン セイシ 成人
シクハツ シンクハツ 四月 (か) 281

ホクリ ブクリ 木履 (か) 408
チイサガタナ チシヤガタナ 小刀 (か) 249
チヤブクロ チヤンブクロ 茶袋
キンシ キンシヤ 金絲
ジキロウ ジキリヤウ 食籠 (か) 411
ハンシ ハンシユ 半紙
トビクチ トンビクチ 鳶口 (か) 555
スタアヘ ノタアヘ 滑稽 (か) 585
ナリクダモノ ナリケダモノ 生果
イワナシ イハナシ 磐梨 (か) 515
ヤシワゴ ヤシヤゴ 玄孫 (か) 314
シユクラウ シクロ(ウ) 宿老 (か) 348
ワウイ ワウイン 王位

ホカイ ホツカイ 行器 (か) 413
ゾウリ ジヤウリ 草履 (か) 407
カミソリ カミスリ 剃刀 (か) 428
マツヤニ マツヤネ 松脂 (か) 422
イハイ ユハイ 位牌 (か) 383
モメン モンメン 木綿 (か) 356
トカケ トカキ 龍子 (か) 533
タニシ タノシ 田螺 (か) 535
ナリコン ダイコ 大根 (か) 517
タカジヤウ タカンジヤウ 鷹匠 (か) 346
アキジ アキジリ 青盲 (か) 493
シヤウ シユシヨ 師匠 (か) 285
チンジユ チンジ 鎮守

ズキン ズツキン 頭巾 (か) 361
チヤセン チヤツセン 茶筅 (か) 416
ダンセン ダイセン 團扇 (か) 390
コリ コウリ 骨柳 (か) 397
ニヤウハチ ミヤウハチ 鐃鈸 (か) 371
ニクケイ ニツキ 肉桂
クンアハビ クシヨビ 串鮑 (か) 589
ムメボシ ムメボウシ 梅干 (か) 592
コホウ ゴンボ 牛房 (か) 516
ダンナ ダンナン 檀那 (か) 349
ザトウ ザツトウ 座頭 (か) 296
ゲクウ ゲツク 外宮
ラウカ ラウカン 廊架

トウシン トウシミ 燈心 (か) 392
チヤキン チヤツキン 茶巾 (か) 415
タンケイ タイケン 短檠 (か) 391
シビン シヒヒン 尿瓶 (か) 409
カウロン カウロン 香爐 (か) 418
ブンドウ フンドン 分銅 (浮) 284
ミヽズ メヽズ 蚯蚓 (か) 534
クワシン クワシン 菓子 (か) 577
ビハ ビヤ 枇杷 (浮) 267
レキ レツキ 歷々 (か) 258
シヒト シヒト 死人 (か) 158
ギバ ゲバ 者婆 △10
ゲンクワン グンクワ 玄關 (浮) 212

イヤルジ 家主 イハラジ
ジチャウ 仕丁 ツチヤウ 浮81
デンガク 田楽 レンガク か579
シエ 紫衣 シエエ
投石 イシナゴ
ウタン 迂誕 ウサン
セイシ 勢至 セイシユ 浮64
ツミ 紡錘 ツム
ヂツキヨ 蠶居 チヨコリ
テキト 與的 テツキリ

（三字のもの33句、但し阿弥陀寺は四字句）

シヤクナンゲ 石角花 シヤクナキ か498
ヌカコ 零餘子 ムカコ か514
ミヒヤウノハシ 御廟橋 ミミヤウノハシ か621
シエリケン 手裏劍 シリケン か430
レイジンノマヒ 伶人舞 レンジノマヒ か331
ノババ 柳馬場 バンバ 浮2
マンジユジ 萬壽寺 マンヂヨウジ 浮19
フツクワウジ 佛光寺 ブン 浮18
シンセンエン 神泉苑 シヂンデ か612
キラ、コヘ 雲母越 クラ、コヘ
ケイトウケ 鷄頭花 ケトキ か506
ニンジン 胡蘿蔔 ネンジン
イハラシヤウビ 茨薔薇 イハラセウベン か521
サ、ケ 大角豆 サ、ギ 浮246
ハブタヘ 羽二重（ハブタイ） か358
ナガレクワンヂヤウ 流灌頂 ナガレカンヂヨ か170
コザトヘン 小阜肩 コザルヘン か742
ユイキヤウキヤウ 遺教經 イキキヤウ
セイグハンジ 誓願寺 セン か615
マツケイジ 末慶寺 マンケン
ニヨホウブツ 如法佛 ホン
ヨトモセス 不レ為レ音 ヨトモシカイデ か261
ヌサバリモノ 主張者 ノサバリモノ
ハンゲシヤウ 半夏生 ハゲツシヤウ か271
イロリ 圍炉裏 ユルリ か627
エホシ 烏帽子 ヨホシ か403
タンシヤウニチ 誕生日 タイシヤウニチ か178
ナイダイジ 無大事 ダンナイ か131
ナンゼンジ 南禪寺 ナイゼンジ か618
グセイジ 弘誓寺 ブセン
アミダシ 阿彌陀寺 ダイ 浮25
ビクニ 比丘尼 ニン か294

ヲフワクモノ 枉惑者 ヨ、チヤクモノ
サンコウシヅメル 三業靜 サンコシツマル
カトウギ 加棟木 カツヨキ

（四字のもの4句）

ウンデイバンリ 雲泥萬里 ウンテンバンテン △113
ソナタシダイ 其方次第 ソナタホウダイ か242
タリキホウカ 他方奉加 タルキホウグワン か439
ジンツウホウベン 神通方便 リンツウホウベン か226

重言雜言 重言音訓付左「かたこと」と関わるもののみを挙ぐ。

（一字のもの4句）推 ヨシズイ か201

（二字のもの97句）入府 ニウブイリ か291　黄疸 キワウタン か482　沽却 ウリコキヤクス （か207）
陳皮 チンヒノカハ か588　晩鐘 イリアイノカネ 浮233　萬事 ハンジノコト か291　親者 ヨヤジヤモノ か291
母者 ハ、シヤヒト か291　病者 ビヤウシヤモノ か303

（三字のもの6句）――

（四字のもの5句）――

重言不復雜言

（二字のもの28句）――

旧来読曲 二言

（二字のもの19句）――

以錯謬伝（この語は か4）雜言

（二字のもの13句）等閑 か7　此方 か744

（三字のもの6句）果報者 か248　因果人 か248

（四字のもの4句）無二如在一人 か2　新米大豆 浮258

訛与不訛雜言 訛音付二円圈一

栢。蚊。幗。萱 の如く同音語をあげ、区別の点を附す。アクセントに注意したのであろう。

挙ぐる所52語。（〇頁）

譬喩雑言 （如ニ―ニの形、139句）

（三字のもの11句） ――

（四字のもの58句） 如ニ狼ニ著レ衣―か13 如ニ皿ニ盛レ桃―か778

如レ算ニ隣貧ニ―か293

（五字のもの44句） ――

（六字のもの11句） ――

（八字のもの4句） 如ニ法論味噌ノ遇ニ白雨ニ―か766

百物附 （悉く四字句）

頼物―10句 嬉物―10句 惜物―10句 危物―10句 無益物―10句

見事物―10句 無用物―10句 不レ応物―10句 斟酌物―10句

聞度物―10句 合計100句 ――

以上で 世話類聚大尾となり、この後に

跋 硯海波平浮ニ禿筆ニ以下12句があって終り、続いて 世話類聚拾遺 として次の二葉が附けられている。拾遺は「片言」（一部重言）に関するもので55語、岩瀬本以外の本には本文の「片言」の条の適当な所に追加し組みこまれている。字数の別や片言と重言の分類もなく、得るに任せて拾遺し、書き足した形。従ってこの形の残る岩瀬本が原形であろうと思われる。

世話類聚拾遺

一木子撰

片言附重言訛音付左

御影講（ミエイコウ ヨメコ）　御影供（ミエイク）　禁鋼棒（キンコホウ）　妙心寺（メウシンジ メウセンジ）

御幣講（ヨヘイコウ ヨヘコ）　南天（ナンテン ナッテン）浮265　半紙（ハンシ ハンシノカミ）　窮屈（キウクツ キンクツ）

繪馬（エマ エンマ）一説エムマ 一説猿馬　一足（イツソク イソクノアシ）　一眼（イチガン イチガンノメ）　正月（シヤウゲワツ）浮224

葬礼（レイ サウレン）　幽靈（ユウレイ ユウレン）　精進（シヤウジン シヤウジ）か18　墓処（ムシヨ ムシヨドコロ）

五條天神（ノテンシン テンシ）　鼻紙袋（ハナカミブクロ ハナガンフクロ）　煙管（キセル キセリ）　神馬（ジンメ ジンメノムマ）

豌豆（エンドウ エンドウマメ）　管絃（クワンゲン クワゲン）　小便（シヤウベン シヤウベ）　與レ透（スキト スツキリト）

計（バカリ バツカリ）―か115

行燈（アンド アンドン）か295　螢（ホタル ホタロ）―浮167　蝶（テウ チヨテウ）　齬（ハグキ ハコキ）　流通（ルツウ ズツウ）

桝掻（マスカキ マスカケ）浮294　反古（ホンコ ホウグ）か436　所務分（ショムワク シヤウブワケ）か215　鼻緒（ハナヲ ハナゴ）　中酒（チウシユ チウシン）

腫氣（シユキ シキ）　袖覆輪（ソデブクリン ブクリ）　捨之衣（シヤノコロモ シヤノシヤノコロモ）　天邪鬼（アマノジヤキ アマノジヤコ）

集錢（シウセン シユセン）　晩景（バンケイ バンケ）　分限（ブンゲン フゲン）　襦袢（ジユバン ジバン）

狗子（エノコ エノコロ）　穢多（エタ エツタ）か316　聖靈（シヤウレウ シヤウライ）か169　元結（モトユイ モツテン）か402　合點（ガツテン ガテン）

頓（ヤガテ）—（ヤンガテ）（か）237　八景（ハツケイ）（ハツケ）　念佛（ネンブツ）（ネブツ）　三昧線（サミセン）（シヤミセン）（浮）272

観音（クワンヨン）（クワンノン）（か）607　天守（テンシュ）（テンシ）一説殿守又守作主　珠数（ジュズ）（ズズ）　賭祿（カケロク）（カケトク）（か）4

備考　拾遺の前の頁は余白で、種彦の書き込みがある。拾遺の内容に関するものなので、左に掲げる。（〔　〕は原本の改行。）

柳亭曰

ミエク　片言ニアラズ　切子ノ棒　幕串の類ヲ云　禁錮トハ別物也〕

南天燭（ナンテンチヨク）が正音也　エンマ古言也エウマの音便　シヤウジミト云が古言也〕シヤウジトモいふべき歟　キセリ　古クかくもいへり語意考えざればいづれが〕是なるを知らず今ハキセルト云　アンドン古クかくいへりドウのウ文字を〕はねていふ　馬（ウマ）ヲンマトいふに同じ　子ブツ。ンヲはぶきていへるも古キ〕例なり　音ノンととなふるも片言にあらず〕

ズズハよしジュズハ片言なり　数珠（スジュ）が正音也　ジュノかへしズ也〕

ハナカン袋も片言にハあらず　ミヲントはねる　つねのことなりかんざしハかミさし也〕

此作者漢学者にハ　和語にハくらき人也〕

5、世話類聚にみる『かたこと』の投影の数字的表示

世話類聚は、言わんとする項目をそれぞれ字数（言数）で分別表示している。之らを一語一句として捉えると凡そ次のようになる。

A、本文

正篇　二言↔八言……470語句
雑篇　片言……210〃
　　重言……112〃
　　重言不復……28〃
　　旧来読曲……19〃
　　以錯謬伝……23〃
　　訛与不訛……52〃
　　譬喩……128〃
　　百物（四言）…100〃
　　計　一、一四二語句

B、拾遺

片言（附重言）……56語
　　總計　一、一九八語句

右の中に投影せる『かたこと』の項目番号を示すと左の通りで、『かたこと』巻一から巻五に至る全800条の中から万遍なく取材されていることを知る。

260	199	111	2
261	201	113	4
262	202	115	7
263	207	117	10
270	211	118	13
271	215	127	13
276	220	131	14
277	221	135	16
278	222	140	18
279	226	141	24
280	232	144	25
281	237	150	32
281	240	158	52
283	242	165	53
284	248	169	67
285	248	170	73
286	249	177	75
291	254	178	77
291	256	188	108
291	258	190	110

790	617	535	435	383	291
791	618	536	436	385	293
792	621	544	439	390	294
794	624	555	443	391	295
796	625	561	465	392	296
	627	562	468	397	300
	660	568	479	402	302
	663	576	480	403	303
	676	577	482	407	310
	742	579	493	408	314
	744	585	498	409	316
	755	588	500	411	331
	760	589	506	413	346
	761	592	514	415	348
	764	594	516	416	349
	765	602	516	418	355
	766	606	517	422	356
	778	607	521	427	358
	781	612	533	428	361
	789	615	534	430	371

（同一番号のあるは、その回数だけ別々に引用されているもの）計185項。

なお『浮世鏡第三』と一致する項23、『かたこと百廿ケ条』と一致する項が3ある。

世話類聚の全語句一、一四二、之に投影した『かたこと』185項の比率は16％である。これを更に片言の部のみに絞って対比すると、

世話類聚の片言　210項に『かたこと』の投影　135項…64％
〃　重言　112項に　〃　15項…13％
同　拾遺の片言　56語に　〃　11項…20％

となり、両者の関連の密なるを知る。

6、『かたこと』の系譜線上より見る世話類聚

以上述べてきたように、世話類聚は「世話」の語を冠し、これに関連する語句を収集し、文字数によって類別したもの。而して全篇に亘り『かたこと』の投影が見られ、殊に「片言」の部において極めて濃厚である。

「世話」を冠する書としては先に俳書の世話焼草（世話盡トモ―明暦二）あり、特に元禄8年に出た『世話重宝記』とは連関も深いものがあろうと推察されるし、本書の著作年代が種彦のいう貞享年間までは遡れないにしても、池上本巻末記により少なくとも享保15年以前であり、大田氏の推察にみる藤氏松月と同一著者であるとせば、『浮世呉竹』とのつながりも密接であろうが、今は後考を俟つ。いずれにせよ『かたこと』の系譜線上の、しかも比較的早い時期の著作であると推察される。

二、天理本の写本　かた事なをし

本稿は日本文学研究14号『かたこと』（その一）の二の㈡『かたこと百廿ケ条』についての追補である。

1、元禄難波前句集の中の『かた事なをし』

昭和55・7・16、天理図書館で、秘蔵写本『元禄難波前句集』（仮題）を見せて頂く。特異型の大本一冊（但し三冊を合綴したもの）で、用紙は雲母引刷模様入布目紙、縦二五・八糎×横二〇・一糎、丁数は現在百三十二。表紙の裏に「元禄六酉七月廿七日表具師田中吉左衛方よりうつし来る」とあり、外題も見当らないので、仮に最初の部分の内容と写された時代とを取って、元禄難波前句集という。

秘蔵書たる所以は、標題の内容の故にではなく、この本を修理すべく剝がした際、紙背から西鶴の自筆文書が出て、二万翁の署名や書判（かきはん）もあり、かくて特別貴重本となった。元来は袋綴じであったが、修理の際に剝がして裏面を出したので、今は元の一葉が二葉と

して綴じられ、表も裏も見ることができる。思うにこの本は、西鶴らの書いた紙を裏返して綴じこみ、メモ帳として使用したものらしく、内容は標記の前句集の外、幾つかをあげると、（アラビア数字は現在の丁数）

かた事なをし（8—13）　大坂大佛講覚　72—73
狂〔漢〕詩？　25　過去帖　74—84
五社明神御歌　27　伝記　85—87
仙剤奇妙湯　31　七高僧之次第　88
南都大佛縁起　53—60　親鸞上人　89—94
本朝六十余別　64—66　当麻寺建立工事　95
大峰行者堂　67　大峰—勧化簿　96—98
〃　寄進物覚　68—70　数へ歌　113
漢詩　71　など

書かれている年代は元禄三、四、五年である。本稿で検討するのは右の**かた事なをし**である。

さて、本書の中の**かた事なをし**は8枚目から始まるが、その13枚目は、

五色のほめやうに次第有事

(114)扨又五色の色により　……　有とても　人乃」

で切れている。次の14枚目は別の記事だから、この間に落丁があるのだろう。

（アラビア数学は『かたこと』考　付録その二『頭注かたこと百廿ケ条』につけた項目番号）

先に『かたこと考』（笠間選書122）にとりあげ翻字した「かたこと百廿ケ条」の原本は、国会図書館本（木版）であるが、内容は右の**かた事なをし**の本とほぼ同じ。『かたこと』の一支系として、「かた事なをし」（或いは「片言なほし」）の名で行われていた写本を、木版出版するに当って「かたこと百廿ケ条」と改名したらしい。出版日は不明だが、合刻された「なにはおそまきはなしのたね」などから推して、出版元は京か大阪である。

京大図書館顕原文庫に在る「片言なほし」は、あと書に拠れば顕原謙三翁（退蔵博士の尊父）80才の時の写本で、時は昭和18・2・16、である。題名は天理本に近いが、語句や字配りは国会図書館本に全く同じ。或いはこの顕原文庫の写本の原本は国会図書館本かと推定される。

蓋し国会図書館本の帙の裏に、書肆あての顕原退蔵博士の手紙が参考に挟んであり、曰く、「かたことの本は大変珍しいものです。国語学上の一寸面白い資料だと思ひました。云々」とある。納本以前に退蔵氏が一閲しているのである。

2、天理本の写本「かた事なをし」の文字・語句

この写本を国会図書館木版本と比較すると

(イ)漢字化が著しい

国会図書館本の木版本は　百　廿　など僅かに22字の漢字を用いるに過ぎなかったが、天理写本は、

扨又五色の色により

の如く、多くの漢字を使っている。内容だけを書写する場合は、漢字の増加は当然の帰結であろう。

(ロ)文字字句の異動がある

1 元日（くわんじつ）をぐハんぜつとハかたこと　もとの日とかくなり（木版本）
一元日（くわんじつ）を　ぐわんぜつとハかた事　もとの日と書なり（天理本）
（さてこれよりハ長うたにかきつゞるものなり（木版本）
（是より永哥に書つゞるものなり　（天理本）

右の如く文字・字句の差は若干あるが、しかし中味の大様は同じ。

3、本書の成立時期

前稿（日本文学研究14号の168ページ上段）で「刊記なし、…貞享・元禄頃の刊か。」と推定したが、この元禄難波前句集なる写本が「元禄六酉七月廿七日…うつし来る」とあるにより、その写本の中の一部たる本書**かた事なをし**も元禄六年以前の成立であることが確認できた。